

## 九州の児童文学散歩

### 河野 孝之

今号の特集名が「筑紫洲から九州の児童文学」であるとして原稿依頼を受けた。筑紫洲（筑紫島）は八世紀の歴史書『古事記』や『日本書紀』での表記で、律令制時代に

九つの地域になったことがあり（筑前国・筑後国・肥前国・肥後国・豊前国・豊後国・日向国・大隅国・薩摩国）、それが「九州」の由来かもしれないが、室町・鎌倉時代頃から九州探題（鎮西探題）という行政組織を作るなど、九州という言葉が使われるようになり、明治維新以降、行政用語として「九州」は定着する。その際、九州本島だけではなく沖縄も含まれることがあるが、現在は、九州・沖縄という言い方が一般的だ。今回は、沖縄は含めないということと、「筑紫洲」という特集名になったと推測される。

私個人は、福岡に生まれ、育ったので、できればそのうち「福岡児童文学史」なるものを書きたいと夢想しているので、大人もの作家を含めて福岡出身作家の作品は気にして追っかけてはいるが、「九州」という視点は、あまり持

ち合わせていなかった。九州という風土や歴史が児童文学者や作品にどのようにかかわっているのか、付け焼き刃ではあるが、探索してみたい。

気候、土地柄、生活文化などが「風土」に含まれるが、子どもにとっては、テレビを含めた遊びもその環境のひとつになる。私に通っていた小学校の中や通学路には、元寇防塁の石が無造作に転がっていて、小学校は松林の中にあった。当然、松の木にボール当てしたり、石の上で何も考えずに遊びまわっていた。時折、大人に怒られたが、なぜ怒られるのかわからなかった。そのまま放置しているのが悪いと友達同士で言っていた記憶がある。後年、その石ころのまわりが柵で囲われ、説明看板も設置された。

また、父親は旅行好きで、私が子どものころは、家族旅行を頻繁にしていた。車に家族五人で乗って（最初は軽自動車だった）、親戚の家（意外と九州各県にいた）や旅館に泊まって小学校時代には、九州全県を制覇していた。長